



認定NPO法人
ワンダーポート理事長

稲村 厚 司法書士

いなむらあつし

1959年生まれ、日本大学法学部卒、南山大学人間文化研究科教育フロンティア専攻修了。1988年司法書士試験合格。現在、認定NPO法人ワンダーポート理事長、認定特定非営利活動法人リハビリサポート・ネットワーク理事、精神保健福祉センター等で家族教室の講師や個別相談も担当。著書に「キャンブル依存と生きる」(彩流社)。

あるべき

依存問題対策の姿とは

キャンブルの問題を抱える人の支援施設「ワンダーポート」の理事長を務める司法書士の稲村厚さん。借金問題の面から依存問題を見てきた稲村さんが考える、あるべき依存問題対策の姿を聞いた。

私は1990年に事務所を開きました。当時は多重債務が社会問題化する前、一部の弁護士や司法書士が工夫して債務整理する活動をしていました。私もその活動に参加していました。その活動の中でワンダーポートの中村努さん(現・施設長)と知り合い、キャンブルの問題を抱えた人の回復施設を作るので協力してくれ

ないかという話があったのがワンダーポートと関わったきっかけです。その後2010年に借金業法の改正があり、年収の3分の1までしか借りの300万円か400万円。

ことができなくなり、債務処理の相談者の状況も変わりました。規制前はちょうどパスコなどで射幸性が高い機種があったよう、500万円、600万円という借金がぐくあたり前でした。規制後はそれが明らかに少なくなり、多くても300万円か400万円。

最近では自己破産で債務を処理するケースが増えてきました。そもそも収入がない、あるいは生活保護を受けている人が多いからです。最近キャンブルにハマっている人たちの中には、発達障害や知的障害の方方も少なくありません。そういう人たちは返済したいが無理なので、自己破産を選びますね。キャンブルの問題は結局表面的には債務の問題なんです。問題が表面化するの借金が見つかったというケースがほとんどです。

昨年からのキャンブル等依存問題対策基本法をめぐる議論では、一部の人がキャンブル依存症対策をワンダーポートで語っていて、そこに多様性がありませぬ。キャンブルの問題は人それぞれでさまざまです。借金が1000万円の問題を抱える人もいれば40万円の問題になる人もいる。そういう人たちに同じパターンへの支援で大丈夫なのかと疑問に思います。いまの議論をもとにした対策を作ってしまうと大きな間違いを起すのではと危惧しています。

まず、キャンブル依存という現象はいまの日本ではどういった問題なのかという定義づけをしなければなりません。キャンブル依存症の疑いがある人の人数を調べるだけではなく、精神科や回復施設、GAなどでインタビュして、実際にどういった人がどういった問題を抱えているのかというキメ細かい調査が必要だと思えます。ワンダーポートでは昨年、

さらに最近では1000万円を切るケースが圧倒的に多くなりました。いまキャンブルで問題を抱えている人たちは、もともと生活能力の低い人が多いため、お金を借りてまで行ってしまう。消費者金融は規制がありますが、最近問題化している銀行のカードローンは規制がないので、いまはほとんどが銀行からの借り入れです。

「キャンブル依存アセスメント・回復支援センター」を立ち上げました。それはその人が持つ背景の「見立て」をして、個々に合わせたアドバイスをするためです。今回ワンダーポートがそうした形に舵を切った。そこで集まった情報がデータとして蓄積されていくことが多様な対策が練られるのが理想です。

自然治癒力を阻害しない環境を整える。多くの依存問題の支援は、指導する人がいてこういうやり方という感じですが、でもそれでは本人との信頼関係ができません。いまワンダーポートが、これまで私が目指しているのは、できるだけ友だちになること。ここに来る人は孤独な人が多いんです。せめてここに来たときには何でも話せたり、笑い話ができるような関係を築く。その上で本人の意見を尊重して、どうしたいかを尋ね、それを

に考えていく。信頼関係さえ築ければ、ほとんどの問題は上手く解決できます。だからこそ、ワンダーポートが1カ月のアセスメントで見立てをするのは、現実には即していません。1年かける必要がない人はたくさんいますから。1カ月でアセスメントをして、その人に合う環境を整えてあげれば、自然治癒に近い形でキャンブルをやめることができる、もしくはコントロールができる、と思います。自然治癒力があると想定すれば、自然治癒力を阻害しないように環境を整えるというのです。依存問題だけで完結しないで、そこを入口に生きていく環境づくりをしなければならない。そういうゴールを目指して、これまでとすべくいろいろなことを考えています。

「キャンブル依存アセスメント・回復支援センター」を立ち上げました。それはその人が持つ背景の「見立て」をして、個々に合わせたアドバイスをするためです。今回ワンダーポートがそうした形に舵を切った。そこで集まった情報がデータとして蓄積されていくことが多様な対策が練られるのが理想です。

自然治癒力を阻害しない環境を整える。多くの依存問題の支援は、指導する人がいてこういうやり方という感じですが、でもそれでは本人との信頼関係ができません。いまワンダーポートが、これまで私が目指しているのは、できるだけ友だちになること。ここに来る人は孤独な人が多いんです。せめてここに来たときには何でも話せたり、笑い話ができるような関係を築く。その上で本人の意見を尊重して、どうしたいかを尋ね、それを

に考えていく。信頼関係さえ築ければ、ほとんどの問題は上手く解決できます。だからこそ、ワンダーポートが1カ月のアセスメントで見立てをするのは、現実には即していません。1年かける必要がない人はたくさんいますから。1カ月でアセスメントをして、その人に合う環境を整えてあげれば、自然治癒に近い形でキャンブルをやめることができる、もしくはコントロール

ができる、と思います。自然治癒力があると想定すれば、自然治癒力を阻害しないように環境を整えるというのです。依存問題だけで完結しないで、そこを入口に生きていく環境づくりをしなければならない。そういうゴールを目指して、これまでとすべくいろいろなことを考えています。